

敦煌本『論語疏』に見える「無為、謂不躁動也」は郭象の説か

著者	高橋 均
雑誌名	中国文化：研究と教育
巻	73
ページ	[1]-[13]
発行年	2015
URL	http://doi.org/10.15068/00151020

敦煌本『論語疏』に見える 「無為、謂不躁動也」は郭象の説か

高 橋 均

問題の所在

日本に伝わる室町時代抄写の旧抄本『論語義疏』（以下「旧抄本」と略す）の為政篇首章「子曰、為政以德」の義疏には、次のような郭象の注2条が繋がれて見える。その1条は「子曰、為政以德」条下に繋がれている

- ① 故郭象云、万物皆得性、謂之應。夫為政者、奚吏哉。得万物之性、故云、應而已也。

であり、もう1条は同章「譬如北辰居其所、衆星共之」条下に繋がれている

- ② 故郭象云、得其性則順之、失其生（性）則違之⁽¹⁾。

である。ところで論語義疏には、旧抄本のほかにその異本として、敦煌より発見された敦煌本『論語疏』（以下「敦煌本」と略す）が存在し、この2条は、敦煌本にも見える。両本の郭象注を比べてみると、①にほとんど差異はないが、②については、敦煌本には下線を付した部分が加わっていて、次のようである。

故郭象云、得其性則歸之、失其性則之違（違之）。無為、謂不躁動也。

敦煌本は、一、二字分の空格でもって一文の区切りとする。しかしこの文には空格がなく、一続きで記されるから、それに従えば、下線部分の「無為、謂不躁動也」を合わせて郭象の注となり、旧抄本には見えない一句が、新たに加わることになる⁽²⁾。ところがここで問題を複雑にするのは、旧抄本を詳細に見てみると、この章に付された集解（鄭玄注）下に比較的長文の邢昺の論語正義が書き入れられていて、その書き入れの末尾に下線部と同文の「无為、謂不躁動也」が記されていることである。しかし現行本の論語正義にはこの一句は見えないから、この句を正義の一文と認めることはできないであろう⁽³⁾。

「無為、謂不躁動也」という一句は、敦煌本によれば郭象注とみなされるが、旧抄本によれば郭象注には存在せず、また邢昺の正義でもない。この「無為、謂不躁動也」を郭象の注と認めてよいのか、もし郭象の注でないとすれば誰の説なのか、そうした問題を以下考えてゆくことにする。

一 郭象の論語注

論語義疏にはすべてで9条の郭象注が引かれてみえる。これらの注が何に由来するのか、そのことをまず問題とする。『隋書』『経籍志』、『旧唐書』『経籍志』、『新唐書』『芸文志』を見てみると、郭象の論語注として次のような記述が見える。

隋書経籍志

論語體略二卷晉太傅主簿郭象撰。

論語隱一卷、郭象撰、亡。

旧唐書経籍志

論語體略二卷郭象撰。

新唐書芸文志

郭象論語體略二卷

ここから郭象に『論語体略』二卷、『論語隱』一卷という二種類の注があったこと、そのうちの論語隱については、隋書経籍志にすでに「亡」と記されるから、比較的早い時期に散佚してしまっているのであろう。また論語体略についても、これら三書目に見えるだけで、後代の書目には見えないから、論語体略もまた早くに散佚してしまっているのであろう。今ではこの二書がいかなるものであるかを知るすべはないし、論語義疏に引かれる郭象の注が、この二書のいずれによるのかなどを知ることもしかない⁽⁴⁾。しかし論語義疏に引かれて見える郭象の論語注が、これら二書に由来するものであることは認めてよいであろう。

ここで確認しておきたいのは、論語義疏に見える9条は、皇侃が郭象の論語注から直接引いたものではないということである。論語義疏の序によれば、皇侃は江熙の『集解論語』中の十三家の説を択んで論語義疏に採り入れたとあり、その十三家の中に郭象の名が記されているから、郭象の注も江熙の集解論語から論語義疏に採られたものであろう⁽⁵⁾。その経路を整理すれば次のようになる。

郭象論語注（論語体略・論語隱）→江熙が集解論語に採り入れる→皇侃が論語義疏に採り入れる→論語義疏の中に9条が残存

二 郭象の訓詁説

今論語義疏には郭象の注9条が見え、さらに敦煌本によれば、郭象の注と考えられる「無為、謂不躁動也」という一句が加わることになる。この句が郭

象の注であるのかどうか、ということは今問題としている。

「無為、謂不躁動也」を見てわかるように、形式的にも内容的にも、この文は「無為」についての訓詁的注である。これに類する訓詁的注が、すでに知られる郭象の注に存在するのかどうか。存在することが確かめられれば、この「無為、謂不躁動也」も郭象の注として認められる可能性が出てくる。郭象の注として取りあげるのは、論語義疏に見える9条の論語注と郭象の『莊子』注（「逍遙遊」と「齊物論」の二篇に限った）である。

- 1) 政者、立常制以正民者也。
- 2) 刑者、興法辟以割物者也。
- 3) 徳者、得其性者也。
- 4) 礼者、舛其情也。（以上の4例は論語義疏為政篇「導之以政」章所引）
- 5) 野馬、遊氣也。（逍遙遊）
- 6) 冷然、輕妙之貌。（逍遙遊）
- 7) 天地者、萬物之總名也。（逍遙遊）
- 8) 正者、即是順萬物之性也。（逍遙遊）
- 9) 聖人者、物得性之名耳。（逍遙遊）
- 10) 籟、簫也。（齊物論）
- 11) 大塊者、无物也。（齊物論）
- 12) 濟、止也。（齊物論）
- 13) 調調、刁刁、動揺貌也。（齊物論）
- 14) 偶、對也。（齊物論）
- 15) 聖人、无我者也。（齊物論）
- 16) 達者、无滯於一方。（齊物論）
- 17) 純者、不雜者也。（齊物論）
- 18) 天倪者、自然之分也。（齊物論）

残念ながら郭象の注釈から、今ここで問題としている「無為、謂不躁動也」に類する訓詁を見出すことはできなかった。しかし郭象の論語注から4条、そして莊子注からも多くの訓詁的注を見出すことができるから、郭象に訓詁的注があることはとりあえず確かめられた。

三 郭象の注釈に「無為」という語を探す

郭象の注に「無為、謂不躁動也」という訓詁を見つけることはできなかったが、郭象が訓詁的注を作っていることは確かめることができた。そこで次に、

郭象は「無為」という語をどのようにみているか、その点を明らかにしよう。はじめに郭象の論語注に「無為⁽⁶⁾」という語を探してみる。ただその論語注はわずか9条と少ないので、「無～」にかかわる語を広く含めることとし、それを次にあげる。

- 1) 今堯舜非脩之也、万物自無為而治。(憲問篇「子路問君子」章義疏)
- 2) 无心而付之天下者、直道也。(衛靈公篇「吾之於人」章義疏)
- 3) 聖人无詭教／聖人无吏(衛靈公篇「吾嘗終日不食」章義疏)
- 4) 聖人無心(陽貨篇「陽貨欲見孔子」章義疏)

郭象の論語注には「無心」「无詭教」「无吏(事)」などと並んで「無為」という語が用いられている。しかしその「無為」は、1)「堯や舜が修めたのではない、万物がそれなりに無為であることで治まったのである」というように、「無為」という語を注釈の必要もない自明の表現としてそのまま用いていることである。そのほかの「無心」「无詭教」「无吏」などにしても、「無為」と同じように、いずれも訓詁を要しない既知の表現として用いていることがわかる。

次に莊子注について見てみる。莊子注には「無為」が頻出するので、ここでは「無為」だけに限り、また本文に「無為」という語がある場合の注釈は採っていない。すると以下のような例をあげることができる。

- 1) 夫莊子之大意在乎逍遙遊放、无爲而自得。(逍遙遊)
- 2) 夫治之由乎不治、爲之出乎无爲也。(逍遙遊)
- 3) 无爲而性命不全者、未之有也。(人間世)
- 4) 自三代以上實有无爲之迹。(駢拇)
- 5) 守斯道者无爲之至也。(馬蹄)
- 6) 一无爲而群理都摯。(天地)
- 7) 夫在上者患於不能无爲。(天道)
- 8) 同乎天地之无爲也。(天道)
- 9) 无爲勞心於窮通之間。(秋水)
- 10) 夫无爲之樂无憂而已。(至樂)
- 11) 无爲用心於其間也。(知北遊)
- 12) 從无爲爲之乃成耳。(徐无鬼)

1) から12) に示したように、「無為」は郭象にとってしばしば用いられ、きわめて重要なタームであるとわかる。しかしたとえば1)で「莊子の大きな思いは逍遙遊放にあって、無為のままで手に入れる」とあるように、莊子注においても「無為」は「何も行なわない」という行為を否定するタームとしてその

まま通用していて、訓詁的な注釈を必要としない語彙である。このように論語注、莊子注のいずれにおいても、郭象にとって「無為」は既知のタームであって、注釈する必要のない語なのである。

この論文の目的は、くり返し触れるように「無為、謂不躁動也」という注釈が、郭象の説であるのかどうかを明らかにすることである。論語注及び莊子注などから明らかになることは、郭象が「無為」という語を既知のタームとして注釈する必要のない語として用いているのであれば、論語為政篇のこの章においてわざわざ「無為」を取りあげて、「無為、謂不躁動也」というような訓詁的注を作ることがあるのかどうか、いささかの疑いが生まれるのである。

ここまででは、どちらかといえば、郭象の注一般を問題としてきた。そこで次にこの問題の出発点に戻って、「無為、謂不躁動也」が為政篇首章では何についての注釈として記されているのかということを探ってみよう。

四 為政篇首章に見える郭象注は何に付された注か

問題の発端は、「無為、謂不躁動也」という句が、敦煌本では郭象の論語注と合わせてひとつの文のように記されていることにあった。そこであらためてこの章の郭象の注2条をここに再録して、それが何についての注であるかをみることとする。（下線部が敦煌本で加わっている句）

① 故郭象云、万物皆得性、謂之應。夫為政者、奚叟哉。得万物之性、故云、應而已也。

② 故郭象云、得其性則順之、失其性則違之。無為、謂不躁動也。

旧抄本によると、①は「子曰為政以德」下に、②は「譬如北辰居其所而衆星共之」下に、義疏の一文としてそれぞれ繋がれている。同じ郭象注を敦煌本で見ると、①は「為政以德は何」という経文を提示した下に疏として、②は「北辰者」という経文を提示した下に疏として繋がれている。この①②が経のどの句に繋がれているかという点では、標示の違いはあっても両本に差異はない。それをより限定して示せば、①の郭象注は、「為政以德」の「徳」について、②の郭象注は、「北辰」について説き明かしているようにみえる。そこで①②の郭象注を読んでみると、①は「徳＝得」として、「徳」とは「万物の性を得ること」と説明するから、「徳」を説いたものと認められる。そして②については、譬えとしての「北辰」が、位置を変えないことをいっているようにも読めるが、郭象注は「得其性」「失其性」といっているから、徳の「得失」に言及したものと考えられ、①の「万物皆得性」「得万物之性」をうけた文であって、

「北辰云々」の句との直接のかかわりはないとみることができるようである。

そうすると為政篇のこの郭象注①②は、旧抄本で見ると「子曰為政以德」、そして「譬如北辰居其所而衆星共之」にそれぞれ分けて繋がれているが、それぞれの句を対象として作ったものではなくて、①②を合わせて為政篇首章の主題である「徳」を対象として作った注釈であることがわかる。それが今論語義疏で見られるように別々に二つの句に繋がれているのは、郭象の論語注を後人⁽⁷⁾が論語の注釈として採り入れた時、それぞれの句に適宜分けて繋いだからであると考えられるのである。

このようにみえてくると、郭象が「性」について説いている②は、「得其性、則帰之、失其性、則違之」までで終わり、この章の「徳」が「万物に備わる性を得ているか否か」を説き明かすことで完結する。そうであれば「無為、謂不躁動也」の句は郭象の①②部分とは関連せず、たまたま敦煌本で一連の文のように記されているに過ぎないことがわかる⁽⁸⁾。

それでは「無為、謂不躁動也」は、論語義疏為政篇首章の何を問題とした句であろうか。この句が訓詁的注であることからみて、この章のいずれかに対象とする「無為」という語が見えなければならない。旧抄本、敦煌本ともにその経文に異同はなく「子曰為政以德譬如北辰居其所而衆星共之」であって、この経文からは、いま問題としている「無為」に結びつくようなかかわりは見出すことができない。そしてこの章の集解に鄭玄注が引かれていて、次のようである。

鄭玄云、應者無為、譬猶北辰之不移而衆星共之也。

鄭玄もまた郭象と同じように「徳」について注を記していて、それが「徳者無為」である。ここに初めて「無為」なる語がみえるから、「無為、謂不躁動也」の「無為」とは、論語鄭玄注、あるいは何晏の集解に引かれた鄭玄注についての訓詁注ではないかと考えられるのである。もしこの仮定が認められるならば、この訓詁を作った人にとって、鄭玄注の「無為」に疑義が生じた、あるいは「無為」に定義を加える必要があったからであろう⁽⁹⁾。そうすると、もし「無為、謂不躁動也」という句が郭象の注であるとなると、郭象は論語注では「無為」に訓詁を加える必要があったことになる。この点において、先に検討した郭象の注釈の中で、「無為」は既知のタームとして注釈を必要としない語として用いられていたことと矛盾するのである。そうした疑問は残しながら、時間的に郭象は論語鄭玄注、あるいは何晏の集解までもを注解の対象となしえたのであろうか、その点を次に考えることにする⁽¹⁰⁾。

五 郭象は鄭玄の注、何晏の集解を注解の対象となし得たか

論語注を作った鄭玄、論語集解を作った何晏、そして郭象の三人の間に注釈を作るという行為が成り立つのかどうか、そのことをここで考えてみる。鄭玄、何晏、郭象が注釈を作りうる条件としてまず考えなければならないのは、三人の生卒時期で、それは以下のようである。

鄭玄 (127 — 200)

何晏 (190 — 249)

郭象 (252 — 312)

鄭玄と何晏との時間差は、およそ 50 年である。何晏が論語集解に論語鄭玄注を採りいれていることからみると、50 年の時間があれば、その注釈を評価し、自らの注釈に採りいれることが可能となるのであろう。ただ何晏は鄭玄注を自らの注釈に採りいれる際に取捨選択はしているが、鄭玄注にもとづいて新たに何か説を作るというような注釈の対象としているわけではない⁽¹¹⁾。そして鄭玄と郭象の間は 120 年、何晏と郭象との間がざっと 60 年である。これだけの時間差があれば、郭象が鄭玄の注、あるいは集解にとられている鄭玄の注を注釈の対象とすることは可能なものではなかろうか。そうしたことを明らかにするために、論語鄭玄注、あるいは論語集解がいつころから注釈の対象になったかということをごここでみることにする。

論語鄭玄注に広い意味で注釈を加えた人に虞喜（晋武帝太康 2 年 281 — 晋穆帝永和 12 年 356）がいる。隋書經籍志によれば、

論語九卷⁽¹²⁾ 鄭玄注、晋散騎常侍虞喜譌。

とあり、虞喜に鄭玄注についての「譌」なる書物があることからそう推測する。隋志のこの記録だけからでは「譌」の内容を具体的に明らかにできないが、論語義疏に残る虞喜の論語説 2 条から、間接的ではあるが見えることがある。その 1 条は、雍也篇「仲弓問子桑伯子」章に見えるものである。問題とするのは、この章の「子桑伯子」を鄭玄は実在の人物とし、一方王肅は架空の人物として説が分かれる。この二説について、何晏は集解の中に鄭玄の実在説を採らずに、王肅の架空人物説を採って「王肅云、伯子書傳無見也」と記す。鄭玄と王肅のこうした二説について、今論語義疏に見える虞喜の説は、『説苑』を引いて、王肅説を批判し鄭玄説を補強しているようにみえる。残る 1 条は、郷党篇の「子路供之、三臭而作」についてで、鄭玄の解釈は「子路が時節のものとして雉を孔子にさしあげたが、孔子は三度かいただけで食べようとしなかつ

た」とする。それに対して虞喜の説は、「子路が雉に食べ物をやったが、雉は三度かいただけで飛び去った」とし、「三臭」の主語が分かれるのである。虞喜の説2条のうち、1条は鄭玄の説を補強し、1条は鄭玄説とまったく異なる。評価相反するこれら2条が、隋志でいう「讚」であるのかどうか確証はないが、虞喜が鄭玄の論語注に関心を持っていて、論語の経ではなくて、鄭玄注を対象として注釈を作っていたことは明らかである。

何晏の集解にかかわって説を立てたことがはっきり分るのは、蔡謨（晋・武帝太康2年281－晋・穆帝永和12年356）である。蔡謨の論語説は、今論語義疏に10条残っている。たとえば雍也篇の「子見南子」章に見える蔡謨の説は次のようである。

矢、陳也。尚晁叙曰、皐陶矢厥謀也。春秋經曰、公矢魚于棠、皆是也。夫子為子路矢陳天命、非誓也。

ここで蔡謨は「矢、陳也」という訓詁を示して論を立てているが、これは集解の孔安国の説「矢、誓也。子路不説、故夫子誓之」に対して、それと異なる説を示したものであることは明らかである。さらにまた顔淵篇「樊遲問仁」章に記される蔡謨の説に対して皇侃が、「案蔡氏之通、与孔子（氏）無異」という按語を加えている。これは蔡謨が集解に見える孔安国の説に対して批判を加えていることに対する皇侃の按語である。また衛靈公篇「躬自厚」章に記される蔡謨の説に対して、皇侃が「侃按蔡雖欲異孔、而終不離孔辭、孔辭亦得為蔡之釈也」という按語を加えている。これもまた蔡謨が集解に引かれる孔安国の説に批判を加えていることに対する皇侃の按語である。ここからみても、蔡謨が経ばかりでなく、集解に対しても注釈を加えていることが明らかとなるのである。

さらに時代は下るが、顧歡（晋・恭帝元熙1年420－南齊・武帝永明1年483）、樂肇（生卒不明）、太史叔明（生卒不明）、褚仲都（生卒不明）、熊埋（生卒不明）、繆協（生卒不明）などにも集解を対象とした注釈が見える。

こうしてみると、鄭玄注を対象として説を立てた虞喜の生卒が（281－356）、集解を対象として説を立てた蔡謨の生卒が（281－356）で、この二人と郭象との差がおよそ30年であることから推して、時間上からは郭象が論語鄭玄注、あるいは何晏集解に注釈をつけようとするれば可能であったといえよう。

六 郭象は論語集解を注釈の対象としたか

前節では郭象が論語鄭玄注、或いは論語集解に注釈をつけることが可能かど

うか、注釈が成立する客観的条件について考えてみた。そして虞喜、蔡謨からみて、郭象も論語鄭玄注、あるいは論語集解を対象として注釈をつけることは可能であろうと判定した。

今論語義疏には郭象の論語注9条が残っていた。これら9条によって、郭象が作った論語注はいかなるものであったかを考えることにする。

述而篇「子在齊」章に次のような郭象注が見える。

〔経〕 子在齊、聞韶樂、三月不知肉味、曰、不啻為樂之至於斯也。

〔集解〕 周生烈曰、孔子在齊聞習齊君韶樂之盛美、故忽於肉味也。

〔郭象〕 傷器存而道廢、得有声而无眴。

郭象注の大意は、「器は残っていても道がなくなっていることを痛み、音楽は存在しても時に合わない状況にある」というから、形だけが残っていることに衝撃を受けた結果、「肉の味を知らず」といったと解する。一方集解は周生烈の説を採って、「韶樂の盛んな様子から、肉の味がわからなくなった」という。結論はまったく反対で、集解に対する郭象の反論とも取れるが、二つの説に直接の関連は見出すことができない。郭象の注は短いが、この注は個別の句に対する注釈ではなくて、この章の要点を述べているのではなからうか。次に先進篇「顔淵死」章に見える郭象注を見てみよう。

〔経〕 顔淵死、子哭之慟、……

〔集解〕 馬融曰、慟、哀過也。

〔郭象〕 人哭亦哭、人慟亦慟、盖无情者与物化也。

集解に引く馬融は「慟、哀過也」というから、「哭」と「慟」との差異を述べただけである。そして郭象注の大意は、「他人が哭慟すれば、わたしも哭慟する、固定した情を持たないことで万物と同化できるのだ」という。郭象の説は、「固定した情を持たないこと」に重点があり、この章から導き出された彼の考えを示していて、集解とはまったくかかわることがない。

さらにまた為政篇「導之以政」章には次のような郭象の注が見える⁽¹³⁾。

〔経〕 子曰、導之以政、

〔集解〕 孔安國曰、政、謂法教也。

〔郭象〕 政者、立常制以正民者也。

〔経〕 齊之以刑、

〔集解〕 馬融曰、齊整之以刑罰也。

〔郭象〕 刑者、興法辟以割物者也。

〔経〕 民免而無耻、

〔集解〕孔安國曰、苟免罪也。

〔郭象〕制有常則可矯、法辟興則可避、可避則違情而苟免、可矯則去性而從制、從制外正而心内未服、人懷苟免則无耻於物、其於化、不亦薄乎、故曰民免而无耻也。

〔経〕導之以德、

〔集解〕苞氏曰、德謂道德也。

〔郭象〕德者、得其性者也。

この章の「政」「刑」「免」「徳」などの語に集解と郭象の注が見えるが、その内容は異なり、これら訓詁的な注においても集解との関連性を見つけることはできない。

先に見た為政篇首章、さらに述而篇「子在齐」章、先進篇「顔淵死」章に記される郭象注は、いずれも章全体を直接対象として論を立てている点で共通する。また為政篇「導之以政」章には訓詁的注が見えるが、それをも含めて章全体を対象とした注であるようにみることができ。そしてこれら郭象の注からは、集解を批判する、あるいは否定するというようなかわりさえも見えてこない。このように集解と郭象の注とを比べても両者にかかわりがなく、郭象が集解に注釈をつけた可能性はまったく考えられないから、集解に引かれた鄭玄の説「徳者、無為」に郭象が注釈をつけるという可能性も、限りなく疑わしくなってくるのである。

七 鄭玄の「徳」と郭象の「徳」

為政篇「為政以德」章については、すでに「四」で触れた。ここであらためて「徳」に限定して、鄭玄と郭象の説を取りあげ検討する。

「徳」についての鄭玄の説は次のようである。

徳者、無為。譬猶北辰之不移而衆星共之也。（為政篇「為政以德」章集解）
それに対して、郭象の説は次のようである。

万物皆得性、謂之徳。夫為政者、奚叟哉。得万物之性、故云、徳而已也。
得其性則反之、失其性則違之。（為政篇「為政以德」章義疏）

徳者、得其性者也。（為政篇「導之以政」章義疏）

両説を整理すると、次のようになろう。

徳＝無為（鄭玄の説）

徳＝得性（郭象の説）

鄭玄が「徳」を「無為」とするのは、「おこなうことがない」の意であろう。

一方郭象は「徳」を「得」とし、さらに「性」という概念を導入し、「(万物の) 性を得ること」と解している。そうすると郭象の「徳」は、「性を体得する」という点で、積極的に対象に働きかける力を内在していて、鄭玄のいう「無為」とは根本的に異なることがわかる。

集解に見える鄭玄の「北辰が位置を変えないこと」をたとえとする「無為」は、それで注釈としては完結しているが、やがてその「無為」を説き明かす必要がでてきて、それが「無為、謂不躁動也」という注釈ではなかろうか。この「不躁動」とは、まさに「北辰」が「余計な動きをしない」ことである⁽¹⁴⁾。そして先の郭象の注でみると、郭象は「得性」を中心として説明し、「北辰」には重点を置かず、言及もしない。この点からしても、「無為、謂不躁動也」という注釈を作った人は、郭象ではありえないことになる。

以上から考えられることは、この「無為、謂不躁動也」は、集解「徳者、無為」にかかわる注釈、それを義疏とみても差し支えない⁽¹⁵⁾ のであって、経・注と対応させて記された場合には、集解の下に繋がれるのが正しく、旧抄本については、正義の書き入れとその位置を交代させなければならない。また敦煌本については郭象の注とは分けて、「故郭象云、得其性則歸之、失其性則違之」と「無為、謂不躁動也」の間に相応の空格があるべきであろう。

まとめ

ここまで論じてきたことの筋道をたどると以下のようなだろう。

- 1) 郭象にも訓詁注がある。
- 2) 郭象にとって「無為」というタームは既知のもので、注釈の対象としない。
- 3) 郭象は論語鄭玄注、あるいは何晏論語集解に注釈を付けることは可能であるが、義疏に引かれる郭象注からみると、郭象は鄭玄注あるいは集解を注釈の対象としていない。
- 4) 郭象が「徳」を「得其性」とし、「徳」に能動性を帯びさせている点において、鄭玄の「徳者、無為」とは根本的に異なる。

以上から「無為、謂不躁動也」は、郭象の注釈・訓詁ではなく、集解に引かれる鄭玄注「徳者、無為」に付された注釈＝義疏と判定し、新たに加わった義疏の1条とみる⁽¹⁶⁾。

注

- (1) 底本の清熙園本論語義疏にも敦煌本論語疏にも、明らかに抄写時の誤りが見える。

文の前後から正しい語を（ ）に示したが、再度引く場合には、正しく改めた文を用いた。

- (2) この問題については、すでに拙著『論語義疏の研究』第2章「敦煌本『論語疏』の研究」(四)「敦煌本『論語疏』の疏文を中心とした解説と分析」で結論だけを示しているが、論証はしていない。本論はその論証を主とする。
- (3) 旧抄本に書き入れられた当時の正義には、この一句があった、ということもひとつの想定としては可能であるが、それを論証する方法を今思いつかない。
- (4) 論語義疏に引かれて見える郭象の論語説は、比較的短い訓詁的な文と長文の論述的な文とに分かれる。このように明らかに異なる文章は、郭象の二つの注釈書に由来するのではないかということ推定したことがある。「郭象の論語説をめぐって」(『漢文教室』第170号 大修館書店 1991年11月)
- (5) 論語義疏の序に晋代の論語説家13人の名前が記される中に、その一人として「晋黄門郎潁川郭象字子玄」とある。これら13人は、もともとは江熙(晋末)が『集解論語』十巻に引いているもので、それを皇侃が論語義疏を撰述したときに論語義疏の中に採り入れたという。
- (6) 資料の引用は依拠した資料にしたがっている。すると「無為」は「无爲」と書かれることが多いが、論述の中ではとくに問題がある場合を除き「無為」と表記する。
- (7) ここで「後人」というのは、郭象の説を論語に採り入れた最初は、今分っているかぎりでは江熙の集解論語十巻であると思われるから、このような表現にした。
- (8) 敦煌本の乱れについては、拙著『論語義疏の研究』第二章「敦煌本『論語疏』の研究」を参照。
- (9) 「無為」が道家のタームとして用いられていることは、ここでわたしがいうまでもないことである。それではこの鄭玄の「無為」はどのようなであろうか。旧抄本論語義疏で見ると、この鄭玄の「無為」にかかわる義疏は記されていない。しかし道家の「無為」との異なりを明らかにする必要はあるはずで、そうした人が記したのが「無為、謂不躁動也」ではなかったか。
- (10) 経書についての注釈が「伝」あるいは「注」と呼ばれ、それが漢代から始まることはよく知られている。それではこれら「伝」「注」についての注釈は何時頃から始まるのか、つまり後の「疏」あるいは「義疏」に発展してゆく注釈が何時から始まるのか。「無為、謂不躁動也」がもし郭象の論語説であるとすれば、「疏」「義疏」の起点のひとつを郭象に置くことができるのである。

その場合、経に伝・注が作られる場合と、経に疏が作られる場合とでは大きく異なるはずである。経に伝・注が作られる主たる要因は、時間の経過によって経が言語的に理解できなくなることがあげられるであろうが、伝・注についての注釈は、言語上理解できなくなった、注解に疑問が生じて自説を述べる必要が出てきた、あるいは補足する必要があるという状況がなければ作る必要はないはずである。そしてそれには一定の時間が経過する必要がある。しかも経と違って、対象とする伝や注が周知評価されていることも必須条件になるはずで、こうしてある注解が一定の

時間を経過する中で周知評価され、その注解に不可解な点や疑義が生じた時に注釈は作られるのであろう。

- (11) 現存する唐写本の論語鄭玄注と、論語集解に引かれた鄭玄注とを比べると、何晏が集解に引くのは論語鄭玄注の十分の一ほどである。
- (12) 旧唐書経籍志に「論語十卷 鄭玄注 虞喜讃」とあり、新唐書藝文志に「虞喜讃 鄭玄論語注十卷」とある。
- (13) この章は紙幅の都合上後半部分を省略した。
- (14) 「躁動」という語については、季氏篇に「言未及之而言、謂之躁」とあり、その集解に鄭玄の「躁不安静也」という注が引かれて見え、また経文に繋がる義疏に「是輕動將躁之者」と記される。こうした注釈からみて、「躁動」「輕動」「不安静」がほぼ同義で、「落ち着かない」「必要以上に騒ぎ立てる」「先走る」という意味になるであろうか。すると鄭玄のいう「無為」とは、「落ち着いている」「騒ぎ立てない」ということになろう。
- (15) とりあえずこのような結論を出したが、旧抄本では正義の書き入れはすべて義疏の後ろに記される。「無為、謂不躁動也」を義疏とみると、この条だけが正義の後ろに記されて例外となる。正義の書き入れが誤って行なわれたものか。
- (16) 義疏にも、訓詁が数多くみえる。そのかぎりでは、「無為、謂不躁動也」を義疏とみて問題は生じない。

天命、謂窮通之分也。(為政篇「吾十有五」章經所引)

終始、即是分限所在也。(為政篇「吾十有五」章集解所引)

和、謂心不爭也。不同、謂立志各異也。(子路篇「君子和而不同」章經所引)

先生者、成人謂先己之生也。(憲問篇「闕党童子」章經所引)

從者、謂諸弟子從孔子行在陳者也。(衛靈公篇「在陳絕糧」章經所引)

- *『論語義疏』は天理大学附属図書館蔵「清熙園本『論語義疏』」により、『莊子』は芸文印書館発行・中華民国 57 年・台北によった。本論文の引用は、字形をも含めてできる限り依拠した資料にもとづいた。

(東京外国語大学名誉教授)